

ロシアの対中武器輸出戦略

阿部信行

(訳者コメント)

ロシアは朝鮮戦争時代から中国に様々な兵器を輸出しています。
ロシアの対中武器輸出は、両国の軍事的結び付きを強めたこともあり、また反対に武器代金の支払いを巡って核戦争寸前まで緊張が高まった時期もありました。
近年は中国の要求レベルは高く、ハイテク兵器に限定されています。
中国のロシア兵器コピー問題は、ロシアを悩ませつつも、依然としてロシアの対中武器輸出は止まりません。裏側には何があるのか、漢和防務評論 2013 年 8 月 22 日号に、ロシア内部でたたかわされた対中武器輸出に関する論議について記事がありましたので紹介します。
記事から受ける印象では、最近の SU-35 などのハイテク兵器輸出は、プーチンの一存で決まったように見えます。

KDR モスクワ航空ショー特電：

ハイテク兵器である **LADA** 型潜水艦(一部の技術)、**SU-35** 型戦闘機、及び **S-400** 型地对空ミサイルを中国に輸出するのは外界が想像するようには簡単でない。対中輸出許可の発出は、利益集団であるロシア軍事工業界、国防部、さらに国家安全委員会が過去 5 年にわたって慎重に検討し最終的に妥協した結果である。この間の大まかな事情は、**2009** 年前後から説明する必要がある。

SU-27SK 型戦闘機のライセンス生産契約が中断された **2005** 年から、中国には大量のロシア製装備の複製品、すなわち **J-11**、**J-15**、**J-16** シリーズ戦闘機、海軍の各種レーダー、及び火砲が出現した。ロシア軍事工業界、及びロシア媒体は驚き呆れた。ロシアの各級国家機関は、**2009** 年から大量の資金を投入し、中国の武器複製の現状、及び将来展望を分析研究した。ある研究所は、国防工業の委託を受け、専門的な研究グループを編成し報告書を作成した。この時期、中露の軍事協力は基本的に若干のエンジン輸出に限定され、ロシアは敢えて中国にハイテク兵器を輸出しようとはしなかった。

最も人々を驚かせたのは、ロシアが夢にも思わなかったことだが、中国人が **J-11B**、**J-15**、**J-16** のような高性能戦闘機を驚くべき速さで複製したことである。

中国人の複製技術の水準はどの程度なのか？ロシアが現在開発中のハイテク機である T-50 も複製出来るのだろうか？

この時期、対中武器輸出に関して以下のような激烈な討論が行われた。意見を集約すると以下の 4 グループに分かれる。

第 1 グループ（輸出拒否派）：長期的に見て、いずれ中国の複製兵器はロシアの武器輸出市場に衝撃を与える。中国人は信用できない。軍事協力方面で中国と引き続き交渉する必要はない。その代わりベトナム、ベネズエラ等の新市場の開拓を進めるべきだ。今まさに中国の軍事装備品輸入額は逐年減少しつつある。ロシアにとって中国市場への輸出額は当時第 3 位程度に落ち込んでいた。ロシア国防部の多くの官員は、この立場を支持し、同時に中国の軍事機器が強大になりすぎると、遅かれ早かれロシア極東の安全に禍をもたらすと考えた。

第 2 グループ（限定的交渉派）：ロシア軍事工業界がこのグループであった。エンジン工業界が主となり、現行の契約は履行すべきであると主張した。特にエンジン工業界にとって中国は広大な市場であった。毎年、ロシア軍事工業界に約 5 億ドル程度の利潤をもたらしていた。

第 3 グループ（日和見派、分析派）：このグループは、過早に結論を出すべきでないと主張した。彼らは、主として外交部、或いはクレムリンの上層部の人々であり、中露は依然として戦略的パートナーの関係にあり、法に従うとともに武器輸出は高度な政治的角度から取り扱うべきであると主張した。

第 4 グループ（主流派、慎重接触派）：最も重要で現在の主流を為す。このグループは、ロシア軍事工業界で約半数程度の勢力があり、技術に精通し中国の複製技術を過大評価すべきでないと主張した。

第 4 グループの典型的主張は、エンジン輸出制限論！であった。

上述各派は、各自報告書を提出し、一部の報告書はロシア国家安全会議に送られた。

エンジン輸出制限論を主張するグループは、詳細に分析した。2009 年以降出現したロシア兵器の複製品は全てロシア製エンジンを搭載していた。特に航空機及び艦船（ウクライナ製）がそうであった。“ロシア製エンジンを搭載しなければ、中国空軍の全ての第三世代戦闘機は見せかけの空軍機になる” 輸出した戦闘機もまた 1950 年代から 60 年代の水準に戻るだろうと。このグループの主張は当時頻繁にロシア媒体で宣伝された。

2008 年の珠海エアショーに、高度の秘密であった中国国産“太行”エンジンの実物が展示され、西側及びロシア航空工業界は目を見張った。外形設計は言わ

ば 1970 年代の概念であり、1980 年代の工芸水準であった。荒い研磨技術と遅れた材料技術、鋼材を大量に使用、最新の複合材料、セラミック技術は見られなかった（別の言い方をすれば複合材料の使用比率は少なかった）。モジュール化も為されてなかった。ロシアの専門家が“太行”エンジンを積極的に研究した結果、時代遅れのエンジンであることが分かった。また中国は、最新型動力系統の開発を完了したと宣伝していたが、当時空軍の作戦機には装備していなかった。

初期生産の“太行”エンジンを複製機 J-11B に装備した状況から見ると、中国の航空工業界は、エンジンを大量生産するための高品質の部品を安定して供給することができないようだ。

“太行”エンジンの出現は、ロシアの第 3、第 4 グループを安心させた。エンジン輸出制限論を主張するグループは、ロシアの軍事工業技術は少なくとも中国よりも基本的に 15 年先行できる政策を実行すべきであると主張した。

2009 年に、ロシア製武器の中国複製問題に関する大量の報告内容及び専門家の証言がロシアの媒体と漢和防務評論に掲載された。重点項目は以下の通りである。

- 一、複製武器の現状
- 二、複製武器の規模及び将来展望
- 三、複製武器が直面する技術上の問題
- 四、ロシアの武器輸出市場に影響はあるか？どのような影響があるか？
- 五、ロシアの対応措置は何か？

この中で第四項はロシアの各研究部門が最も憂慮した項目である。第五項は上述の四個グループの主張とは関係なく、道理を通すことを求めた。

輸出市場に関して、第 4 グループの基本的主張は：“エンジン輸出制限論”は明らかに今後 10 年間或いはそれよりも長い期間有効であることから、中国の“瀋陽スキー”戦闘機が世界に輸出される心配はないとした。第一、中国空軍自体が“瀋陽スキー”戦闘機に不満であり、しかも多くの機体がロシア製の AL-31F エンジンを搭載しているのであるから、“瀋陽スキー”戦闘機は世界市場でロシア製戦闘機と競争できるはずがないとした。もし競合する状況が発生し、ペルーが MBT-2000 型戦車を購入したような状況が起きたら、エンジン提供をストップすればよい。購入者は商品を返品するしかない。

中国市場に関して、スホーイ航空機会社の高級官員はかつて **KDR** に対し次のように述べた：相当閉鎖的で、不思議な市場であると。どうせ第二の競争者がいないのだ。したがってロシアは、コピー戦闘機が中国海空軍を席捲しようとも怖くない。第二の競争者が現れる心配が無いからだ。

この議論の中で、本誌は考えた：中国側には選択の余地が無く、再びロシアから技術を学ばねばならないと。特に今後ロシア製戦闘機の改良問題が出てくる。

同年、**J-20** 型ステルス機が出現したが、ロシアを更に安心させた。業界内では、欧米もロシアも大きな衝撃を受けることはなかった。一方、**J-20** は、古い設計思想とエンジン技術に難関があることを見せつけた。ロシアの技術者は、**J-20** が次世代機に見えたとしても、エンジン問題が根本的に解決したことにはならないと述べた。したがって **J-20** は、外形上、第 3 世代機でもなく、第 4 世代機でもない実験機にならざるを得なかった。

このことから **SU-35** 及び **S-400** の対中輸出許可は、第 4 グループの主張に従ったものである。結論として、**T-50** 型ハイテク戦闘機及び **S-500** 型地对空ミサイルがすでに出現した状況下において、**SU-35** 及び **S-400** の輸出は、中露の軍事技術格差 15 年を維持することを前提にしても、ロシアの基本国策を破ることにではない。次に、中国市場は閉鎖的であり、競争を考慮する必要が無い。したがってプーチンは再び自らを大統領に当選させ、引き続き中国に軍事装備を提供し中国の注意力を日米に対抗するよう向けさせ、ロシア正面の戦略的安全保障を図った。

中国は、依然としてむつかしい“虎の子供”である。しかも次第に巨大になっていく。将来大きく育てられた時、再びロシアにかみつくことがないだろうか。これに対しロシアの軍事評論家 **N.NOVCHKOV** は、「いつの日か、中国が反旗を翻し我々にかみつこうと思っても、我々には対応策がある。我々が確信出来ることは、中国がロシアから輸入した兵器が必要になるときは、ロシアを攻撃することは出来ない」と述べた。

以上